

長野県植物誌パイロット版

藤田 淳一*・尾関 雅章**・星山 耕一***

1. はじめに

序論

現在、2027 年の長野県植物誌改訂版出版を目標として、委員会運営、現地調査、標本収集等様々な活動を進めている。その中で執筆者が担当する各科の種の説明に関して、分布、形態的特徴、生育環境等を含む 200 ～ 300 文字程度とすることが決定している。いきなり完成版の内容を世に送り出してしまうと、どれだけ完成度が高くとも、その産みの苦しみやプロセスが全く残らないまま、「すばらしい内容」の文書のみが残っていく。後世、同様の活動をしようとした場合、プロセスがわからない状態で、手探りのスタートとならないよう、文字にならない背景などを意識しながら、どうやって完成に至ったのかというのをあえて残すことにより、未来の執筆者に対して役立つ手がかりになるのではないかと考え、パイロット版という形でごく一部を投稿する。文章からの吹き出しは、懸案事項、課題、コメントである。読者の方には、あくまで未完成のものであるという認識を持った上で読み進めて頂ければ幸いである。

植物誌改訂活動の経緯

植物誌改訂活動は、2017 年から開始されているが、その活動を長野県植物研究会誌の紙面上で紹介したことがない。パイロット版というタイトルに対して場違いではあるが、簡単に活動経緯を以下に示す。

- ・2017 年 11 月、委員長中山 洸、副委員長佐藤 利幸、加えて 17 名の委員の合計 19 名からなる改訂委員会発足。
- ・第 1 回委員会にて、植物誌改訂版の出版は 2027 年（長野県植物研究会 60 周年）を目指すこと、長野県を 10 地区に分けて調査をしていく旨決定。同時に委員以外に 10 地区の中心メンバーを決め、

現地調査に協力を依頼。植物誌改訂版改訂委員会議事や植物の話題などを掲載したコラムを添えたニュースレター「SHINANENSE」として配信（図 1、2021 年 1 月現在、第 25 号まで配信）。

- ・2017 年 12 月、各地区の中で既往の標本情報から標本を収集すべき重点調査地区を選定するための基礎資料として 5km メッシュの標本収集状況図面が完成（詳しくは本誌 51 号「長野県の標本資料密度：長野県植物誌改訂での重点調査地域はどこに？」（尾関ら）に掲載）。
- ・2018 年 4 月、県内各地区で重点調査地域を選定し、植物誌改訂に係る標本収集をはじめとした調査が開始される。調査はグリーンシーズンに月 1 回、博物館や地区の中心メンバーが主催。
- ・2018 ～ 2020 年、毎年重点調査地域を選定しながら、調査を継続中。



図 1 ニュースレター第一号表紙

* 藤田 淳一 〒390-0313 長野県松本市岡田下岡田 243-2 サープラス I アルプ 203 号

** 長野県環境保全研究所自然環境部 〒381-0075 長野県長野市北郷 2054-120

*** 星山 耕一 〒420-0885 静岡県静岡市葵区大岩町 2-10-202

2. パイロット版

(1) サトイモ科 (執筆: 星山)

◆ ヒロハテンナンショウ *Arisaema ovale* Nakai

北部、中部、南部に分布。高さ 15~50cm で 5~6 月頃に葉と花序が地上に出る。葉はふつう 1 個で偽茎は葉柄より短く、小葉は 5~7 枚で卵状楕円形~狭倒卵形、小葉間の葉軸は発達しない。花序柄は葉柄より短い。仏炎苞は葉の展開後に開き、緑色または紫褐色で著しく隆起する白条があり、筒部口辺は狭く開出し、舷部は卵形で先端が尖る。花序付属体は棒状あるいは太棒状。木曾方面には仏炎苞が紫褐色のことが多い。果実は 10 月頃に赤熟する。山地 (主にブナ帯) に生える。

1935 年に中井猛之進により京都芦生の森にある濃紫色で花序付属体が太くガッチリとしたヒロハテンナンショウがアシウテンナンショウとして記載された。しかし、緑がかった紫色のものもあり、テンナンショウ属の仏炎苞は同種でも緑色と紫色があらわれることが多く、他種同様変種として区別する必要はないと思われる。

◆ ユモトマムシグサ *Arisaema nikoense* Nakai subsp. *nikoens*

北部、中部、南部に分布。高さ 15~50cm。花期は 5~6 月、偽茎は全高の半分程度でまず仏炎苞が開き、その後に葉が展開する。葉はふつう 2 個、小葉はふつう 5 枚で葉軸がごく短いため接近してつく。小葉は狭楕円形から披針形で葉縁は細鋸歯縁、粗大な鋸歯縁または全縁である。仏炎苞は葉より高い位置につき、通常緑色で白条はあまり目立たない。口辺はやや開出する。

花序付属体は棍棒状~太棒状。果実は 9~10 月頃に赤熟し、花時と同様葉より高い位置につく。山地のブナ帯から亜高山帯に生える。

果実が葉面より低い位置につくヤマナシテンナンショウ var. *kaimontanumu* が山梨・静岡県に次いで長野県内にも分布している情報を得たが、現在災害により道路が崩壊し近づけない状況である。

◆ トウゴクマムシグサ *Arisaema koidzumianum* Kitamura

北部・中部。南部に分布。高さ 40~80cm。花期は 4~6 月。仏炎苞は葉より早く、またはほぼ同時に開く。葉は 2 個、小葉は 7~17 枚で長楕円形、葉軸はよく発達し、時に湾曲または旋回する。仏炎苞は紫色が多く、時に緑色で葉面より上に位置する。舷部は筒部より短い。筒部口辺はあまり反曲しない。花序付属体は円柱状で直径 3.5~7mm、先端は光沢があることが多い。一般にカントウ (ムラサキ) マムシグサ *A. serratum* (Thunb.) Schott と同一とされ、分けられていないが、こちらは口辺がやや反曲し、花序付属体が太棒状~棍棒状で、仏炎苞は葉面と同位置となるなどかなり異なる。果実は 10~11 月に赤熟する。山地帯の林縁、林内に生える。

現在進められている MIG-seq 法などの DNA 解析により、地域による変異が多く、長野県と静岡県でも解析結果が異なることが解明されつつあるので、もう少し経つと大幅に種の入替えが起きる可能性がある。

このタイプ標本は仏炎苞口辺が葉化した奇形な標本なので、今後マムシグサ節の系統樹が確定した時点で、種名の改訂が必要と思われる。

(2) イネ科 (執筆: 藤田)

◆ ムラサキニワホコリ *Eragrostis pilosa* (L.) P.Beauv.

北部、中部、南部に分布。河川敷や未舗装路の踏み跡草地に生育する高さ 10~20cm、8~10 月に開花、結実する一年生草本。従来、種小名 *poilosa* は、オオニワホコリに対してあてられていたが、本誌では、北川 (1964) に従い、本種に対してあてる。オオニワホコリ *E. multispicula* Kitagawa がやや湿った立地に生育するのに対して、本種は乾燥した砂礫地に生育するほか、花穂の側枝は閉じて、直立する。小穂は濃紫色で花序の分岐点は無毛のことがある点が異なる。

北川 (1964、植物研究雑誌第 39 巻 8 号 pp250-254) の説に従った件については、ムラサキニワホコリ、オオニワホコリともにありふれた種であり、混乱を招く可能性があるため、オオニワホコリのところでも触れるか、別途コラムのようなものを挿入した方が良いかもしれない。

◆ キンエノコロ *Setaria pumila* (Poir.) Roem. et Schult.

北部、中部、南部に分布。農耕地、河川敷などに生育する高さ 20~70cm、8~10 月上旬に開花、結実する一年生草本。花穂は、コツブキンエノコロよりも太短く、小穂は一回り大きく、小穂基部の刺毛は、黄金色である。また、コツブキンエノコロよりも第一、第二苞穎の脈が緑色ではっきりと目立つ。また、典型品は、葉の色が白みを帯びた青緑色である。近年、市街地、農耕地、河川敷において急増している花穂が時に 10cm を超えるほど長く、葉が鮮緑色、秆が基部から多数分岐するものは外来系統と考えられ、本種との交雑が進んでいるのか、どちらともつかないものが散見される。

外来系統とみられるものはオオツブコツブキンエノコロと筆者が仮称している。他県においても存在は認識されているが、観察する地域により変異や認識の違いがある可能性が高く、広域での共通認識の形成や、従来のキンエノコロを含めた分布状況の変化なども追跡した上で、正式に文中に記述する必要がある。

◆ カニツリグサ *Trisetum bifidum* (Thunb.) Ohwi

北部、中部、南部に分布。乾燥した草地、林縁に生育する多年生草本で、秆はそう生し、5~6 月に開花、結実する。護穎の先端が 2 深裂し、背面途中から芒がでて、外反する。自然度の高い草地に生育するものは花穂が太く直立し、護穎に紫斑が出て表面がざらつくが、林縁や人為的な影響の強い場所に生育するものは花穂が細くゆるやかにしだれ、護穎に紫斑が出ず表面のざらつきが弱い傾向にある。両者の典型品は識別可能であるが、交雑しやすいとみられ、どちらともつかない形態のものも多い。

ここでは、図鑑的な特徴よりも、県内の実情を優先して記述した。また、Ohwi (1941) により *Trisetum bifidum* とされる前は、護穎に紫斑のでる型を *T. flavescens* Beauv. var. *bifidum* (Thunb.) Makino カニツリグサ、護穎に紫斑のでない型を *T. flavescens* var. *macranthum* Hack. ナガボカニツリとして分けられていた。この埋もれた変種について、今後検証し、カニツリグサとナガボカニツリを区別して記述したい。

(3) リンドウ科 (執筆: 尾関)

- ◆ オノエリンドウ *Gentianella amarella* (L.) Börner subsp. *takedae* (Kitag.) Toyok.

北部・南部に分布。高山帯の草原に生える越年草。高さ 5~20cm、花期は 8~9 月。花冠は紅紫色で、浅く 4~5 裂して開く。花冠の内側にある内片は、1/2~2/3 程度まで細裂する。白馬岳などの超塩基性岩地では、茎や葉が紫色を帯びるものがある。ハヶ岳産の個体では、内片が基部まで裂け、亜種ユウバリリンドウ subsp. yuparensis に近い形態をもつものもある。

シロバナオノエリンドウ *Gentianella amarella* (L.) Börner subsp. *takedae* (Kitag.) Toyok. f. *leucantha* (Hayashi) Toyok.

白花品種。

ハヶ岳産のオノエリンドウとユウバリリンドウについては、萼裂片と萼筒の比を含めて今後比較・検証したい。

- ◆ コケリンドウ *Gentiana squarrosa* Ledeb.

東部・南部に分布。日当たりの良い草地や園地、半裸地に生える一年草または越年草。高さ 3~10cm、花期は 4~6 月。茎の地際に、茎葉よりも大きい根出葉がロゼット状になる。花冠は紫色。萼裂片の先が反り返る。生育地により草刈り等を受けた後、茎を再生させ夏期に開花する場合もある。県内では 1928 年の標本記録を最後に記録が途絶えていたため、長野県版 RL (2002)では絶滅種とされたが、その後、2010 年に富士見町で再発見され (三石・尾関 2010)、以後、茅野市でも確認された。

50 年以上前など古い記録しかない分布域はどのように扱うべきか。本稿では扱っていない分布図を含めて、過去の記録と『長野県植物誌』以降に確認されている生育記録を区別して掲載すべきだろうか。

図鑑等での生態形質では記載されないが、県内での観察された実例を記述した。隣接県の山梨県では個体数が多いことから、県内でも今後さらに確認される可能性もある。

- ◆ ハナイカリ *Halenia corniculata* (L.) Cornaz

全県に分布。山地帯から亜高山帯の日当たりのよい草地や林縁・路傍に生える一年草または越年草。高さ 10~60cm、花期は 8~9 月。分布域が広く、高山帯の風衝草原内に生育する場合もある。花冠は淡黄色で 4 中裂し、長さ 3~7mm の距があり、錨のような形になる。

ムラサキハナイカリ *Halenia corniculata* (L.) Cornaz f. *purpurea* T.Shimizu

花、特に萼が紫色となる品種。松本市蝶ヶ原林道。

品種の記載をどのような形式とするか。これまでの改訂委員会の議論を踏まえ、一つの分類群として母種の解説に含めず別行での解説とすることとした。

3. おわりに

各種の形態的特徴などはすでに出版されている図鑑を読めばわかる。できるだけ図鑑には載っていない長野県ならではの記述を積極的に目指すと、情報不足や県内のことはわかっているが県外はどうか分からず、「ならでは」なのだろうかと思ってしまう。執筆していて痛感するのは、県内の情報ばかりでは全く解決しない、県という枠組みを超えた広い範囲で議論することと、新旧の文献を読み直すことの必要性である。図らずも県の独自性を追求すればするほど、地理的、時間的により広い範囲で情報収集する必要があることが明らかになりつつある。今後、情報収集をこれまで以上に積極的に行っていく。本稿の内容について、ご意見、県ならではの情報があれば、是非お寄せ頂きたい。そうした意見がさらに独自性を高めるものになると考えている。

4. 参考文献

- 北川政夫（1964）東亜植物断想録（17）. 植物研究雑誌第 39 巻第 8 号 pp250-254
- 三石 稔・尾関雅章（2013）長野県絶滅種コケリンドウの富士見町での生育確認.
長野県環境保全研究所研究報告 9pp81-83
- 邑田仁・大野順一・小林禧樹・東馬哲雄（2018）日本産テンナンショウ属図鑑. 北隆館
- Jisaburo Ohwi（1941）Aveneae(Gramineae) of Japan, Journal of Japanese Botany Vol.17(8) pp438-449
- 長田武正（2002）増補 日本イネ科植物図譜（オンデマンド版）. 平凡社
- 芹沢俊介（1986）ユモトマムシグサ（広義）の分類. 植物研究雑誌 61(1), 22-29
- 芹沢俊介（1997）長野県のテンナンショウ属. 長野県植物研究会誌. 30: 1-15